

# 介護老人保健施設しおん

症 例 概 要 利用者 90代 女性

利用期間 : 令和4年2月よりしおん入所

病名 : アルツハイマー型認知症、うつ病、褥瘡

経過 : H28年秋、認知症及びうつ病の悪化との診断される。グループホームに入居するがベッドから転落し大腿骨の骨折で手術してから車いす生活となり、その頃から暴力行為など認知症の進行も見られた。R2年11月頃から下痢や発熱、食思不振等からベッド上での生活となり褥瘡感染との診断され今後の栄養管理や褥瘡処置目的で1年程、K病院へ入院。体調や褥瘡も改善してきた為、当施設へ入所となる。

## 内 容

利用者さんは入所当時より介護に対する拒絶感が強い方でした。リハビリや排泄ケア、褥瘡処置においても「私は何処も悪くありません。」「何すんの、あっちいけ!」と大声で叫んで職員を叩くなどし抵抗が続きました。ご家族から「家にいた時から会話にならなく大変だった。病院に入ってから少しは対応しやすくなったと思います。」と入所以前から介護への抵抗があったと聞きました。

また、1年以上ベッド上で生活されていたとの事でした。利用者さんは入所してから表情が陰しく、笑顔も見たことがありませでした。ベット上で一人でいるときも急に大声で叫んだり、食べ物や飲み物を床に払いのけることもありました。利用者さんの介護拒否や暴力行為に悩んでいた職員も多い為、ユニット会議にて利用者さんに対しての関わり方について話し合いました。オムツ交換時に拒否が多いことから①羞恥心から抵抗②介助を受ける際の不安③環境の変化による混乱が原因と考え、認知症実践者研修を受講した職員が接し方など伝達講習を行い、職員間で共有することにしました。まずは介助を行う前に利用者さんが不安にならないよう、5分程コミュニケーションを図ってから行うようにしました。また、利用者さんは結婚以前の苗字だと思っているので職員は名前では呼ぶようにしたり、オムツ交換を嫌がる時は少し時間を置いてから声を掛け、職員2名で対応を行うようにし、少しずつではありますが職員に対して引っ掻いたり、叩いたりする行為が減っていきました。日々の生活の中で「あの車いす私のだから返しなさい。」と訴えることがあり”起きたい”というニーズがあることが分かりました。介護拒否や暴力行為など減ってきたことで、担当のリハビリ職員と相談し利用者さんが起きたい気分の時に離床を試すことに

しました。日によって気分にもラがあり計画してから数週間かかりましたが、リクライニング車椅子に起きることができました。起きた時には、フロア内を散歩したり他の利用者さんとホールでテレビを観ておやつを食べて過ごしてもらいました。何度か離床した後、暖かくなってきた為外への散歩を促してみたら「行ってみたいね～」と返答されたので、施設の園庭に散歩に行くこともできました。庭の花を見て利用者さんは笑顔で「きれいだね～」と話されていました。

入所から3か月後のカンファレンスで息子さんに伝えると「車椅子で起きるようになったんですか?」と驚きながらも喜ばれていました。ユニット内や他職種職員ともご本人のケアについてカンファレンスを行い情報共有しながらユニットケアを実践できたことで、利用者さんの想いを汲み取り接することができたと思います。これから利用者さんが少しでも笑顔で過ごせるよう支援していきたいです。